



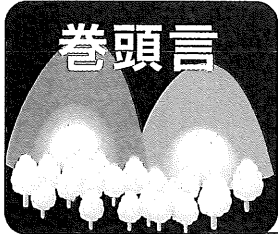
子ども樹木博士 ニュース

2017 - 6

No. 67

子ども樹木博士認定活動推進協議会

巻頭言



子ども樹木博士プログラムを再考する



東京農工大学名誉教授 木平 勇吉

燃えるような若葉の季節となりました。それぞれの樹木ごとに季節を忘れず、間違えずに新しい芽や花を繰り返し生かえらせる自然の精緻な仕組みには驚かされます。

子どもの関心が少しでも緑や自然に向くようにと願った「子ども樹木博士プログラム」は発足から数十年が経った今、当初の意気込みが色あせたように私には感じられます。実施実績は企画回数も参加者人数も年ごとに漸減しています。

その理由を振り返ると、まず、企画する私たちリーダーの熱と気持ちが薄れていることであり、余裕ある教育の流れが社会から消えて樹木の名前どころではないと感じるからではないでしょうか。安全と責任追及ばかりが声高に叫ばれています。次に、現在のプログラムの内容が平凡で子どもを引き付ける魅力に欠けているからかもしれません。リーダーは苦勞して行っても目に見える成果が残らないのでやる気が起こりにくいといえます。

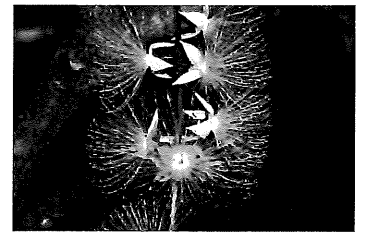
このプログラムを発展させるには、今、さまざまな工夫がリーダーに求められています。子どもや親を集めて樹木の名前を説明して終わるだけではなく、主催する団体ごとに面白くユニークな内容を整えることが

大切です。このプログラムには当初から特定のルールはなく規則・規制が緩やかですが、しかし、子どもの興味を引き出すのは非常にむづかしい仕事でした。大勢のグループ活動ではなく、より親しみと興味とが生まれるには少人数での活動も有効でしょう。樹木を知る方法だけでなく実施する場所・環境、時間や前後のスケジュールなども大切な条件でしょう。リーダーの熱意と良い準備により参加者の興味は盛り上がります。

また、これまで多くのリーダーの熱心な指導にもかかわらず、運動が盛り上がらないのは制度設計ミスかと提唱者の一人として反省しています。今、形も内容も大きく変えていく時期であり、皆さん指導者の一層の創意をお願いする次第です。

終わりに、夜明けに咲き朝日と共に散る華やかな花「サガリバナ」を見た感激は忘れられません。間もなく6月の末に八重山の森に見られます。

子どもが元気いっばいの明るい社会を願って、「子ども樹木博士プログラム」を再考してみませんか。



【目次】

巻頭言	子ども樹木博士プログラムを再考する	東京農工大学名誉教授 木平 勇吉 … 1
特集 I	高尾山の樹木シリーズ(1)	森林インストラクター 藤田 富二 … 2
特集 II	観察会テンパリ日記(5)	森林インストラクター・樹木医 岩谷 美苗 … 3
事例報告	森林環境教育一みやこ町立犀川小学校における「子ども樹木博士」	
		ふくおか森林インストラクター会 中村 美幸 … 4
シリーズ I	樹木の話(5) —サカキとヒサカキ—	森林植物研究者 埴田 宏 … 5
シリーズ II	東南アジアの木々たち(35) —ベトナム北部ハロン湾③—自然と植物の観察会	TREECIRCLE 梅本 浩史 … 6
子ども樹木博士質問コーナー(47)	茨城県植物園 緑のインタープリター・森林インストラクター	堀内 孝雄 … 7
事務局だより	平成 29 年度全国子ども樹木博士認定活動交流会 in 愛知のご案内	… 8



高尾山の樹木シリーズ (1)



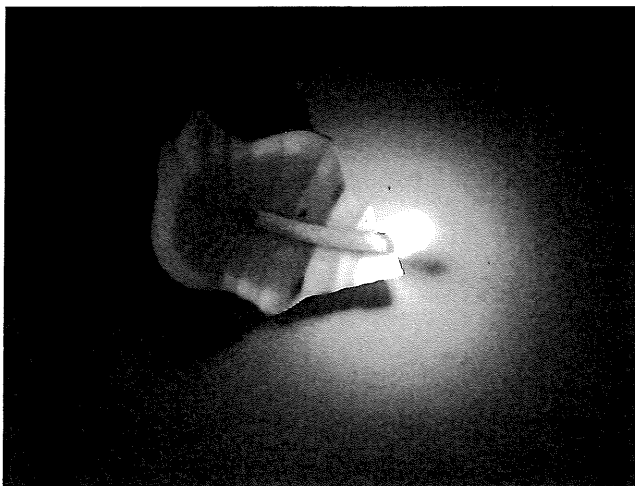
森林インストラクター 藤田 富二

春先の樹木は様々な花を咲かせて私たちを楽しませてくれるが、とりわけアブラチャンやキブシは黄色い花を着け春の訪れを告げてくれる。アオキは赤い実をつけながら花を咲かせる。

(1) アブラチャン (クスノキ科)

森林の中では低木層の樹木である。よく森林の見方のひとつで高木、中低木、低木層の見渡せる場所で「大きくなって天に突き出す木もあれば、低木で少ない光の中で枝葉を広げて生きている木もあります。しかし、森林というのは高木、中低木、低木と色々な木があるから成り立っているのです、大木だけが素晴らしいというのではなく低木も森の中ではしっかりと役目を果たしています。人間の社会と同じように色々な人がいて社会が成り立っています。」という話をしている。森林を擬人的に表現する話の仕方をしている。

このアブラチャンは秋に1センチくらいの丸い実をつける。ある本によれば昔、この実を絞って行灯の油に使ったという記述があり、本の受け売りを観察会等で説明していた。ある時森林インストラクターの仲間がこの実を沢山集めて油を絞ったことがある。その時の油で実際に火を付けて、小さな平皿の灯心がうっすらと灯ったときには感動した。



アブラチャンの灯り

(2) キブシ (キブシ科)

春に黄色のカンザシ状の花を咲かせる。草木染の染料として葉、茎、実のすべてが利用できる。タンニンを多く含んでいるため染め上がりも鉄焙煎で焦げ茶色。みょうばんでは黄色に染まる。山野に自生している樹木はたいがいのは染めることができるが、だいたい似たような黄色系統のものが多い。そのなかにあってキブシはあざやかな黄色が出るので好きな染料のひとつだ。実は五倍子(フシ)の代用としてお歯黒の黒色染料に使われた。試しに自分でお歯黒の染料を作ったときに自分の歯を染めてみる勇気はなかった。お歯黒は明治の初めまで行われていたそうだが写真でしかお目にかかっていない。ちなみにお歯黒にしていると虫歯にならなかったといわれている。

茎に白い髓が入っており割り箸などで髓を抜くことができる。この髓は行灯の灯心に使われていたというので油を皿に入れ髓を灯心にして火を着けてみたら火が着いた。髓を抜いた後は空洞になるため、枝でキブシ笛をつくることができる。細い枝はどんぐりピッコロ(マテバシの笛)の歌口になる。



アブラチャンの油と種子

特集Ⅱ

観察会テンパリ日記 (5)



森林インストラクター・樹木医 岩谷 美苗

最近の図鑑を見ていたら、ユリノキの葉を「Tシャツのような形をしている。」と表現してあり、軽いショックを受けました。うちではハンテンを着ていたの、気が付きませんでした。が、「ハンテン」は通じないのです。確かに「ハンテンに葉っぱが似ているよ。」と言っても今の子どもや若い人たちにはわからないですすね。

イヌシデは花の穂がしめ縄につける紙垂に似ているからと説明しても、まず紙垂がわからないので、説明が回りくどくなり、説明できたとしても「なるほど!」と、感心するほど似ていません。

スギは柱に利用されるということの説明したくても、「お家に柱があるでしょう」と言うのは子どもたちに通じません。「柱がうちにある人!」と手を上げさせたら、なんと驚愕の0人でした。そんなバカな!と私の家も確認したら、ないのです。柱が見えない家がほとんどのようです。時代は変わっていました。もう昔の教え方や表現方法では、通じない世の中になっているような気がします。どんどん新しい表現に変えていかないとはいけません。

しかし、新しい表現を一から自分で考えるのは大変です。もう頭が硬いですし、考えすぎて余計に通じなくなってしまう可能性大です。そこで、小学校や保育園などで仕入れる方法を思いつきました。観察会などに来ている子どもでもよいのですが、実でも花でも「これ何に見える?」と片っ端から聞くのです。保育園の子たちは、落ちているムクノキの実を「ブルーベリーみたい」と言ってくれました。ブルーベリーなんて、私が子どもの時にはなかったですが、今は身近なのです。

匂いに関してもこちらが臭いかなと思うクサギの葉を「ピーナツバター?ブルーチーズ?おいしそうな匂い」と言い、こちらがなんともないムクロジの実が臭いと言います。ヒサカキの花も「ガスの匂い」と紹介するより、「塩ラーメンの匂い」と言った方が共感を得ます。たくさん試して子どもたちの反応を仕入れるのは、案外楽しい作業です。

ニオイヒバの葉の匂いは、パイナップルとよく言わ

れますが、道行く子どもに聞いたら「リゾートホテルの匂いがする。」と答えてくれました。なかなかの表現です。ローズマリーの葉は「焼きそばの匂い」と言い張る子もいます。うちの娘がユキヤナギの花を「ABCマートの匂いがする」と言うので、嗅ぐと本当に新しい靴のような匂いがしました。味をしめて、我が子にもさんざん聞き「また?もうやめてくれる。」と答えてくれなくなってしまいました。みなさんも、仕入れのやりすぎにご注意ください。



事例 報告

森林環境教育

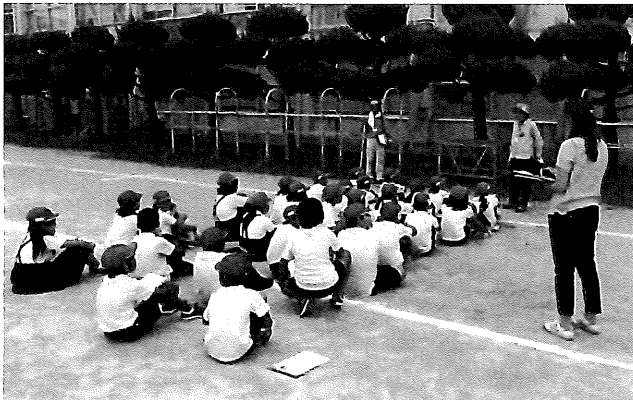
～みやこ町立犀川小学校における「子ども樹木博士」～



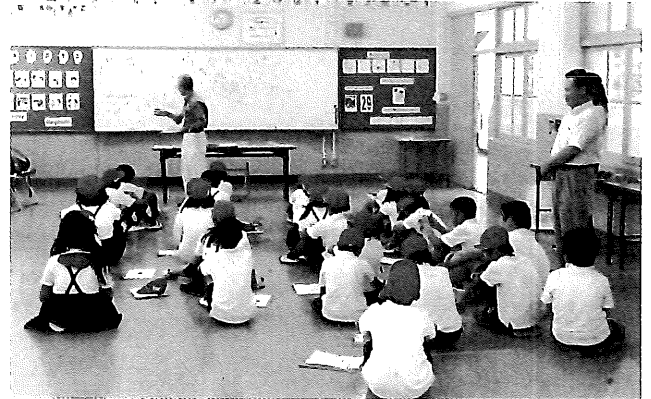
ふくおか森林インストラクター会 中村 美幸

福岡県と大分県にまたがる英彦山を源とする今川の中流域の自然豊かな福岡県東部に位置するみやこ町の犀川小学校の4年生31名の子どもたちと一緒に校内に植えられている樹木を観察した後、自然の大切さを説きながら「子ども樹木博士」を楽しみました。

運動場に集まった子どもたちは、校長先生の「木にも名前があるのを知っているかな？今日は皆で木の名前を覚えましょう！」のあいさつでその場がピリッと締められました。続いて行ったノーズゲームでは、子どもたち全員が日頃からイノシシを見たり、触ったりしたこともあり、「家の周りの作物を荒らす動物は何かな？」のヒントに対し、全員が大きな声で「イノシシ」と叫び、その場が緩み、気持ちよく校内の樹木観察に入ることができました。



日々、運動場で遊ぶ子どもたちも運動場の周りの樹木に足を止めてゆっくり見ることがないとのことでしたが、私達インストラクターに親しみをもち始めてか

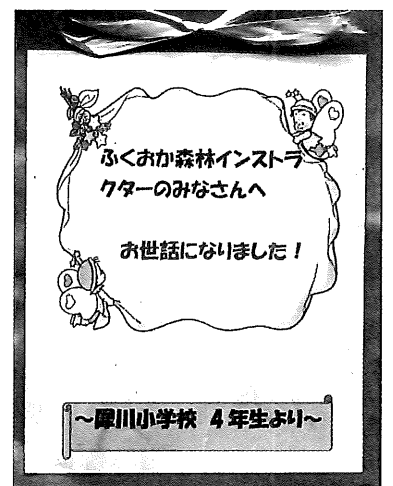


らは、皆が「この木の名前は？」、「この実は食べられるの？」、「この木は薬になるの？」、「この木は何に使われるの？」など樹木に係る質問を矢継ぎ早に浴びせてきました。

そして、教室に帰っての樹木テスト、初めはテストの言葉に緊張していましたが、「子ども樹木博士ゲーム」と呼び方を変えると急に目が輝き、忘れていた樹木の名前も思い出したのか、楽しそうに鉛筆を走らせていました。

最後に、「私たち人間は自然の中で生かされている」という題目で家庭にあるカマ、クワ、マナ板などに利用されている木の名前などを教えることを通して人と自然との関わりを伝えて終了しました。

今回の森林環境教育で一番嬉しかったことは、後日、児童全員から感想文が送られて来たことです。「クスの木の葉が薬の材料になることがわかりました」、これは感想文の一文ですが、小学校の時期から樹木、野の花、生き物などに親しみをもち、大人になった時には自然や環境などを大切にする心をきつと持ってくれると確信しました。



シリーズ I

樹木名の話 (5)
—サカキとヒサカキ—

森林植物研究家 埜田 宏

梅雨空に咲くサカキの花は、葉の下に咲き、目立ちません。でも、この木の名を教えるのに花は不要、枝先の頂芽が長く、鎌のように曲がっている点を強調すれば十分だからです。ただし、鎌を見たことが無い都会の子供たちには、どのように伝えましょうか。

都会でサカキを見かけるのは神社の中ですが、花屋さんにも必ずあります。神社のためというより、神棚に供えるためです。と言うと、神棚のある家がそんなにあるのかと疑問に思われますが、多くの商店や工場には神棚があります。商売繁盛や安全祈願のため、月に2度以上、サカキの枝を活け替えます。切り枝の年間消費量は約5億本(ヒサカキを含む)にもなるので、都会の花屋さんにとっては大事な木なのです。

木へんに神と書いて“榊”ですが、漢字ではなく、日本で作られた国字です。漢名は“紅淡比”、宗教とは関係なさそうです。和名の語源は“栄え木”とされています。「造伊勢二所太神宮宝基本紀」という古い書物に「常緑で自然の正気を受け持つため、多くの木の中からサカキを榊とする」と書かれており、大和本草や和漢三才図絵、牧野植物図鑑で引用されています。成長が良いというより、葉の色つやが良く、萎れたり、変色しにくいためでしょう。“境木”が語源との説は、賢木、坂樹、佐加木と書かれても栄木とは書かれなかったという理由ですが、境木をサカキだけにあてた例はないので、無理があります。

サカキの分布は福島県以南の常緑樹林帯であり、寒



6月に咲くサカキの白い花

冷地では入手しづらいため、同じツバキ科のヒサカキが神事に使われます。古文書には“榊”、“比佐加木”と書かれています。榊は漢名ですが、あまり使われていません。ヒサカキのヒは、サカキに対比されるからとされています。姫サカキ、非サカキ、実サカキが語源であるという説は新しく、根拠が乏しいようです。

サカキは神事のみですが、ヒサカキは仏事にも使われます。呼び方と用途を以下にまとめました。

- ①サカキ、榊、ほんさかき：長さ70~100 cmのサカキの枝、玉ぐし等に用います。
- ②サカキくくり、榊くくり、榊・小束：長さ40~55 cmのサカキの枝10~15本をうちわ状にまとめたもの、神棚に供えます。
- ③ヒサカキくくり、下草くくり、ビシヤクくくり、下草・小束：長さ34~55 cmのヒサカキの枝4~15本をまとめたもの、仏壇や墓に供えます。

現代生活にも深くかかわっているサカキ・ヒサカキは、和歌山県、鹿児島県が主産地ですが、現在は中国からの輸入が95%を超えているようです。価格が安だけでなく、枝が同じ長さにそろえてあり、買ってそのまま活かせるよう配慮がなされています。



サカキの果実と鎌形の頂芽

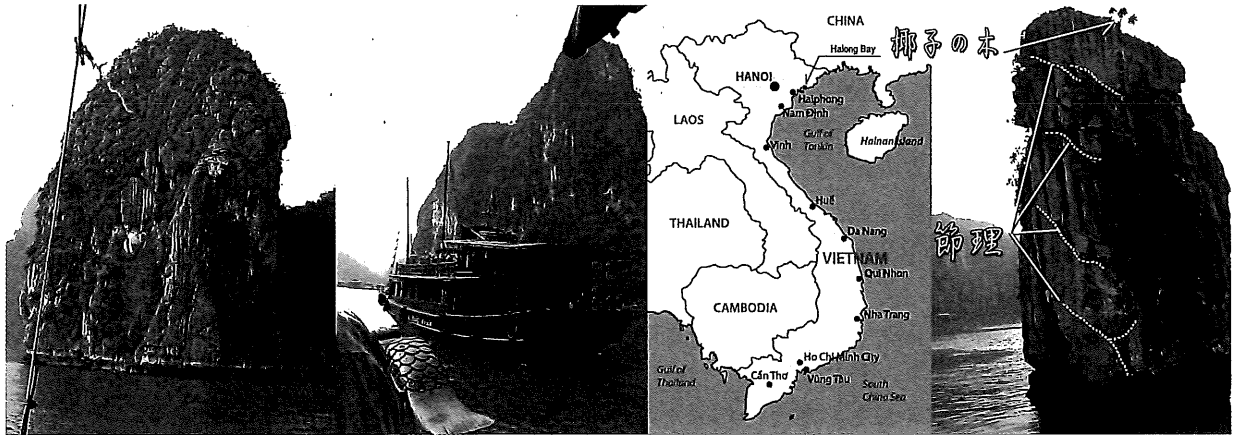
シリーズⅡ

東南アジアの木々たち (35)

—ベトナム北部ハロン湾③—



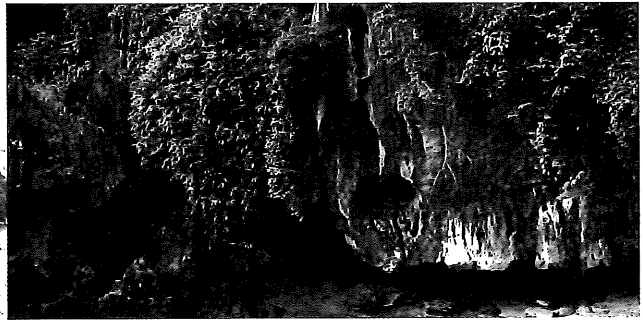
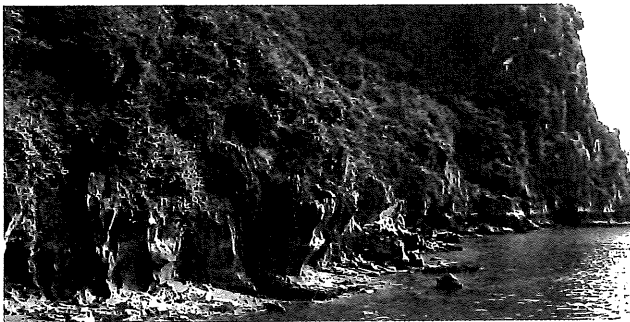
自然と植物の観察会 TREECIRCLE 梅本 浩史



ハロン湾に散らばる巨大な岩の島々を眺めていると、人間の存在はとても小さく、まるでファンタジーの世界に迷い込んだような錯覚がしてきます。そんな島々には、濃い緑に被われる島もあれば、険しい岩肌だけの島もあったり、島それぞれに表情があります。

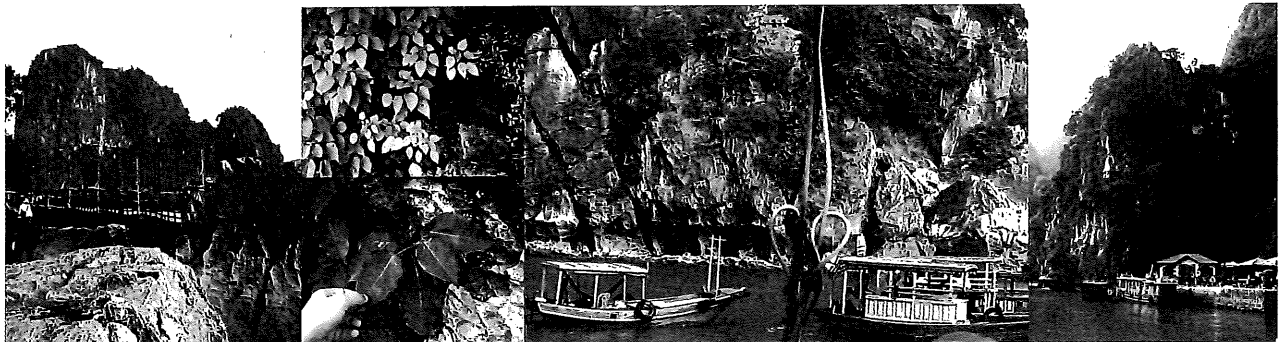
では、最初は皆、岩の塊だった所に、どうして植物たちが生えて森を作れたのかな？という疑問が湧いて

きます。大昔の海底が隆起し、永い歳月を掛けて風雨に浸食されて出来た、この島々。岩盤の表面は、時間と共に風化し、割れ目（節理）等から、小さな砂粒が生じます。地衣類や苔が生えはじめ、草の種子が風で飛来し、生えては枯れてゆきます。こうして、何も含まなかった砂粒には、徐々に有機物が蓄積され、草木の育つ「土壌」が作られてゆきます。



岩や石しかない所（裸地）が、時間と共に植物の群落や森林へと変化してゆく「植生の遷移」を「一次遷移」と呼んでいます。ハロン湾の島々を見てみると、切立った岩肌や大きな割れ目しかない様な場所には、

植物たちが育つ為に必要な「土壌」が蓄えられず、結果、険しい岩肌のままの状態になっている事が、よく判ります。



子ども樹木博士質問コーナー(47)

茨城県植物園 緑のインタープリター・森林インストラクター 堀内 孝雄



Q 公園や庭に植えられているハクモクレンは、コブシとよく似ているので、ハクモクレンとコブシを見分ける方法を知りたいです。

A ハクモクレンは、中国の南西部四川省、雲南省を原産地とする樹木で古い時代に観賞樹木として導入されたもののようです。ハクモクレンは、チューリップのように上を向いて花を開きますが、花弁はコブシより厚ぼたく見えます。花弁は6枚ですが花弁の下に少し小さめの花弁に似た3枚の萼があるので花弁が9枚あるように見えます。コブシは北海道から、九州まで広く我が国に自生する樹木です。北海道に生育するものは、キタコブシと呼ばれます。

コブシは、桜よりも早く開花するので、昔から「田打ち桜」などの別名もあります。農山村で、田植えの準備など農作業を行う時期を決めるなど作業適期の目

安にする大切な生活に密着した植物として利用されてきました。コブシは花が横向きに咲かせ、花弁の開く方向が、あちこちとそれぞれの花の向きが違って開花します。花弁は6枚で、花の下に小さめの葉を1枚つけます。これは花の下の葉っぱ1枚がほかの葉より先だって早く開くからです。こうした葉はハクモクレンにはないので、この違いがコブシとハクモクレンを識別する明確な特徴となっています。

こうした花の咲く時期、咲き方、花の作り、花の形を見ればコブシとハクモクレンの違いがわかります。コブシは、公園や庭園に植えられるほか、街路樹などとして広く利用されています。コブシやハクモクレンはモクレン科モクレン属の植物でこの仲間の樹木は、我が国には多く自生しています。ニオイコブシ(別名タムシバ)、ホウノキ、シデコブシ、オオヤマレンゲなどがあります。

Q 身近で見られるタンポポは、ほとんど帰化植物のセイヨウタンポポで在来のニホンタンポポではないといわれますが本当ですか、セイヨウタンポポは、ヨーロッパでは野菜として利用されていたということですが、どのような食べ方をしていたのですか。タンポポの食べ方を知りたいです。

A 街中の空き地や野原で見られるタンポポは、在来のカントウタンポポなどではなく帰化植物のセイヨウタンポポばかりです。もともと、フランスなどヨーロッパや中東地域では、サラダなどの野菜として食用にされていたといわれます。明治の初めごろ、セイヨウタンポポは、野菜として札幌に導入され、札幌農学校がはじめだったと言われています。

タンポポは、キク科タンポポ属に属す植物で、日本には、カントウタンポポ、カンサイタンポポ、シロバ

ナタンポポ、トウカイタンポポ、シナノタンポポなど多くの在来のニホンタンポポが知られていますが、これらの在来のニホンタンポポは30種以上になります。ニホンタンポポも古く江戸時代などには、救荒植物として利用されていたようです。明治に入っても日本人には、浸し物、和え物、汁の実、てんぷら、漬物、根茎をきんぴらにするなど多くの利用の仕方で、食用にされてきたと言われます。

タンポポの仲間は、ヒマワリやコスモスなどと同じく花茎の上に一つの花を咲かせますので、これを頭状花と言います。この頭状花は、真中の棒状に見える雌しべ、雄しべの筒状花と呼ぶものと花の周りの黄色い花弁、これを舌状花と呼ぶものから出来ています。

ニホンタンポポとセイヨウタンポポの見分け方は、簡単です。タンポポには、花の基部に緑色をした萼のように見える部分があります。この部分を総苞(そうほう)と言い、花の基部を包み込み支える役割をしています。この総苞片がセイヨウタンポポでは反り返っていますが、ニホンタンポポでは総苞片が重なり合って花の基部を花に沿ってしっかりと閉じていて包み込んでいます。両種の区別はこの総苞片が反り返るか、反り返っていないかで明確に識別できます。



セイヨウタンポポの群落
ひたちなか市 2016.4.26
この写真でも花の基部の総苞片が反り返っているのが見られます



セイヨウタンポポの頭状花と総苞片
総苞片が反り返っているのが帰化植物のセイヨウタンポポとわかります

● ● 事務局だより ● ●

◆平成 29 年度全国子ども樹木博士認定活動交流会 in 愛知のご案内

「子ども樹木博士」は、子どもたちをはじめ多くの人たちに、色々な樹木の名前や特徴を知ることを通じて、森林に親しんでもらう森林環境教育の野外活動の一つのプログラムです。子どもたちは、覚えた樹木の名前についてテストを受けて「子ども樹木博士」に認定されます。今回は、多くの方々にこのプログラムを知っていただき実践してもらうために、「子ども樹木博士」を体験していただきます。

今後、自ら「子ども樹木博士」を実施してみたい方、子ども会や学校等で森林環境教育の一環として「子ども樹木博士」を取り入れてみたい方など、森林環境教育に関心をお持ちの方ならどなたでも参加できます。お気軽に参加ください。(参加費は不要です。昼食は各自でご用意ください。(ウイルあいち及び周辺のレストラン等の利用も可能です。) 荒天でなければ決行しますので、雨具等をご用意ください。)

◇日時 平成 29 年 6 月 18 日(日) 10:30~16:15

◇会場 名城公園 (〒462-0846 愛知県名古屋市北区名城1丁目2-25)
ウイルあいち (〒461-0016 愛知県名古屋市東区上堅杉町1番地 TEL:052-962-2511)
(名城公園からウイルあいちへの移動はスタッフが案内します。)

◇集合 名城公園フラワープラザ前広場 10:30 (受付 10:00~)
アクセス: 地下鉄名城線「名城公園」②番出入口より徒歩3分

◇主催 子ども樹木博士認定活動協議会 協力 森林インストラクター会 “愛”

◇プログラム (予定)

- 1 子ども樹木博士認定活動体験
・名城公園において、子ども樹木博士認定活動の体験を行います
- 2 事例報告
・NPO 法人森林インストラクターしずおか
- 3 講演
・森林インストラクター岐阜 会長 河原 誠二 氏
- 4 意見交換

◇問い合わせ (参加申込) 先

子ども樹木博士認定活動推進協議会 担当: 木下
〒112-0004 東京都文京区後楽1-7-12 林友ビル6階 (一社)全国森林レクリエーション協会内
TEL 03-5840-7471 FAX 03-5840-7472
E-mail kodomohakase@shinrinreku.jp
URL http://www.shinrinreku.jp/information/9_index_detail.html

◇参加申込 (先着 30 名様、なるべく早くお申込みください。)

◇参加申込用紙は、上記の URL のホームページからダウンロードできます。

◆実施結果のご報告のお願い

平成 29 年度 (平成 29 年 4 月~30 年 3 月) につきましても、子ども樹木博士認定活動の実施結果をご報告いただければ幸いです。

報告用紙はホームページから Word の用紙をダウンロードできます。また、報告用紙がない場合は、①実施団体名、②実施年月日、③募集人員、④参加人員、⑤対象者 (小学生、親子等)、⑥実施場所等を記載したメモを FAX 又はメールで子ども樹木博士認定活動推進協議会事務局までお送り願います。

子ども樹木博士ニュース

2017 年 6 月 1 日 No.67

子ども樹木博士認定活動推進協議会

〒112-0004 東京都文京区後楽1-7-12 林友ビル6階
一般社団法人全国森林レクリエーション協会内
TEL: 03-5840-7471 FAX: 03-5840-7472
E-mail: kodomohakase@shinrinreku.jp
URL: <http://www.shinrinreku.jp/kyokai/kodomokyoku.html>
<http://www.shinrinreku.jp/kodomo-n/main.html>